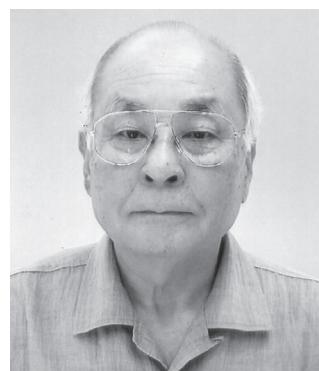




2010年3月28日

いま起きつつあること…

平和講演会 から 村上伸先生の



死刑をどう考えるか

らない」というところから、「生命の畏敬」という考え方が現れました。カール・バルトは、「人間の生命は神様のもの、神様から貸し与えられているものであるゆえに、生命は畏敬されねばならず、あらゆる不遜な否定や抹殺から保護されねばならない」と、「国家の正常な秩序としての死刑」を否定しました。

現在日本のメディアでは治安の悪化ということが事実に反したことから強調されています。ですが実際は悪くなつてはいないのです。

現在、日本のメディアでは治安の悪化ということが事実に反して「ことわざ」に強調されています。ですが実際は悪くなつてはいないのです。

二〇〇七年の殺人件数は一一〇〇〇件と戦後最少で、最多は一〇〇四年の三〇〇〇件

とが求められています。「治安が良くなっている」という情報が報道されないのは、不安や恐怖を煽ったほう
が政治家やメディアにとつて都合がよいためです。「うし
た世相の中で、怯え・不安・恐怖が強くなつて、その結果、
厳罰化が進み、死刑判決が増え、執行数も増えているので
す。

村上伸先生の講演「死刑をどう考えるか」を連続してからわ版でお伝えしてきましたが、今回で最終回となります。

生憎の黙認

第一次世界大戦後、世界を根本から立て直さなくてはな

理由は①見せしめとして死刑には威嚇効果がない。②神の応報の義はすでにキリストの十字架において達成されている。人間の罪は覆われているので、死刑は必要なない。③死刑は、教育刑としての刑罰に矛盾する。——このようにバルトは生命の畏敬の原則から死刑反対を主張しますが、一方で限界状況における例外はあり得るとも述べています。

理由は①見せしめとしての刑罰という考え方に対しても死刑には威嚇効果がない。②神の応報の義はすでにキリストの十字架において達成されている。人間の罪は覆われているので、死刑は必要なない。③死刑は、教育刑としての刑罰に矛盾する。――このようにバートは生命の畏敬の原則から死刑反対を主張しますが、一方で限界状況における例外はあり得るとも述べています。

踏まえれば今の約四倍です。安部元首相が奇しくも「美しい時代」と呼んだ昭和30年代こそ、最も凶悪事件が多くありました。殺人事件といつても未遂や心中事件も含んでいますから、本当の事件数は500～600件、人口ばかりいえばこれは世界一の数字です。年間の水難事故死（700～800件）や交通事故死（約8000件）、自殺者の数（約3万3000件）、こうした数字をきちんと把握して社会をみつめる

二〇〇〇年に少年法も改定されました。少年による事件が凶悪化し、なおかつ多発しているとの理由で、厳罰化されました。が、実際には増えておらず、少年による殺人事件が最も多かったのは一〇〇一年でした。事実に反して、治安の悪化が言われるには、「悪い奴は生かしておくな」という暴力的な考え方を拡げるためではないか、と思われます。それは日本が武装し戦争の出来る国へと向かう論理とも結び付く。不安を煽り、恐怖をあおり、悪い奴はやつつけろ

「のようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい」（ルカによる福音書21章28節）



2010年3月28日

いま起きつつあること…

質疑応答より

という論理、これは個人的には死刑、国際的には戦争に結び付く考え方なのです。

裁判員制度が始まつた今、私たちも、国家の名において行われる「死刑」という殺人に手を貸すことになるかも知れません。被害者の心を思うと難しい問題ではあります。が、死刑で本当に解決がつくのか、辛い葛藤を経たのち加害者と和解できた方たちがあることも覚えつつ、与えられている可能性においてよくよく話し合つていくことが大切であろうと思います。

感想

死刑制度を存続させてきた日本が、廃止に不安があるのは無理もないことです。今日、犯罪件数自体は減つているとしても、無差別な殺傷やいじ

めや自殺など、人間関係の希薄さがもたらす痛ましい事件は後を絶ちません。しかし厳罰化で社会が良くなるものではなく、むしろ、生命が畏敬される社会となつていくことが重要なだと教えられました。

不安や恐怖が社会を取り巻いている限り、死刑廃止は難しいでしょう。ですから、ただ死刑廃止を訴えるのではなく、教育刑を徹底していくことも必要だと思います。過失を犯してしまった人が、新しい環境の中で自分を見つめなおし、過ちや被害者に対する心からの悔い改めをもつことができるようなプログラムがなくてはなりません。10年、20年…と時間はかかったとしても、歪められ傷ついた人生観が癒されるような働きかけが備えられることが大切だと思います。

——機知に富み、読みやすい内容です。著者は「私たちが死刑というものの実際を知らないゆえに、この非人道的な行為が残されている」と主張します。まず事実を知ることから、そして犯罪や刑罰は道

◆推薦書

ホセ・ヨンパルト『死刑はどうして廃止すべきなのか』(聖母の騎士社、2008年、1,220円)



徳の問題であるがゆえに、それをどのように評価すべきかという、原理や状況についても考察がなされています。